

【実践報告3】

# カリキュラム・マネジメントの在り方に関する研究の取組 —新しい時代を生き抜くたくましい生徒の育成—

愛西市立永和中学校 教諭 柴田 竜也

## 1 はじめに

本校は生徒数219名からなる小規模校である。学区には、小・中学校がともに1校ずつであり、義務教育の9年間、ほぼ全員がともに過ごす環境である。生徒の多くは素直で、挨拶がしっかりでき、学習に対しても真面目に取り組むことができる。朝礼では、自分たちで移動し、体育館で教師を静かに待つなど、自分たちで考えて行動することもできている。また、大変落ち着いた地域であり、家庭も学校の教育活動に対して協力的である。

本校では、愛知県より委嘱され平成29年度より2年間、教育課程に関する研究を行っている。この研究の2年目が、「カリキュラム・マネジメントの在り方に関する研究」の1年目になる。本研究が始まる前の平成29年度には、以下の表にあることを研究した（資料1）。

### 【資料1 平成29年度に行った実践】

- ・ 授業をするとき、どのようなことを大切にしているかのアンケートをとる。
- ・ 授業を焦点化して考える。
- ・ 授業実践を繰り返し、教科特性を検証する。
- ・ 年間指導計画を表にまとめる（カリキュラムの「視覚化」）。
- ・ 1年を振り返り、次年度への反省とする。

### 【資料2 視覚化された 第1学年 年間カリキュラム】

1年																																																								
月	4				5				6				7				8				9				10				11				12				1				2				3											
週	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44												
国語	言葉に出会うために				学びをひらく				新しい視点へ				言葉をつなぐ				読書生活				つながりの中で				いにしえの心に触れる				論点を捉えて				読書に親しむ				自分を見つめて																			
社会	地理 世界の姿				世界のさまざまな地域の人々の生活と環境				歴史 古代までの日本				地理 世界の諸地域				アジア				ヨーロッパ				アフリカ				北アメリカ				南アメリカ				オセアニア				世界のさまざまな地域の調査				歴史 中世の日本				地理 日本の姿							
数学	正の数・負の数								文字の式								方程式								変化と対応								平面図形								空間図形								資料の活用							
理科	植物の世界 (植物のつくりと分類)								身のまわりの物質 (個体・液体・気体の物質と状態変化)								身のまわりの現象 (光・音・力)								大地の変化 (地震・火山・地層)																															
英語	Unit0,1,2 be動詞				Unit3 一般動詞				Unit4 複数形				Unit5 Whatを用いた文				Unit6 3人称単数形				Unit7,Unit8 疑問詞				Unit9 現在進行形				Unit10 Can				Unit11 過去形				まとめ				Let's Read.															
音楽	校歌「青空へのほろろ」等				表現「魔王」				鑑賞「魔王」				表現(創作)「音のスケッチ」等				表現「夏の思い出」等				表現「明日への勇気」等				表現「ソーラン節」				表現「海が明けるよ」				鑑賞「フルタバ」				鑑賞表現(創作)「六段の調」				表現鑑賞「四月のいのちの歌」															
体育男子	体づくり理論				陸上競技				相撲				水泳				ソフトボール				器械運動				バレーボール				ダンス				サッカー																							
体育女子	体づくり理論				器械運動				バレー				水泳				ダンス				陸上競技				ソフトボール				サッカー				剣道																							
美術	鑑賞 絵・彫刻 見て感じて、描く				鑑賞 デザイン・工芸 楽しく伝える文字のデザイン				鑑賞 デザイン・工芸 美しい構成と装飾				鑑賞 絵・彫刻 材料と対話して				鑑賞 絵・彫刻 なぜか気なる情景				鑑賞 絵・彫刻 身近な人を見つめて				鑑賞 デザイン・工芸 記憶に残るシンボルマーク				鑑賞 デザイン・工芸 暮らしに息づく木の命				鑑賞 絵・彫刻 心に残ったできごと																							
技術	ガイダンス				材料と加工法				製作品の設計と製作①				製作品の設計と製作②				製作品の設計と製作③				材料の加工に関する技術の評価・活用				デジタル作品の設計製作																															
家庭	ガイダンス				食生活と栄養				献立作りと食品の選択				調理と食文化				生活の課題と実践				調理と食文化				わたしたちの消費生活																															

平成29年度の研究では、授業者が授業を進めるときにどのようなことに気を付けているのかを確かむために、教職員にアンケートを行った。授業者として基本的な技能を身に付けることが大切であるというアンケートの結果から、全ての生徒にとって分かりやすい授業を目指した。そして、分かりやすい授業を行うために、ユニバーサルデザインの視点と焦点化（どこに授業の山場をもっていか）を取り入れた授業実践を繰り返し行ってきた。また、授業実践の反省から生徒のつまづきを意識することが重要であると捉え、目標達成の手だてを考え指導してきた。授業実践を繰り返すことで、ねら

いに迫る授業ができるようになってきたものの、更により授業を展開していくには、全体のカリキュラムや単元全体を捉えることの必要性を感じた。その結果、まとめられたものが視覚化された年間カリキュラムである（資料2）。

平成29年度の実践を振り返って学校評価を行い、本校の教育目標や重点目標を見直して、平成30年度からの研究を進めた。

本校の生徒の特長としては、小学校から変わらないメンバーで生活しており、生徒同士の仲がよく、規範意識が育っている。しかしながら、考えが幼い部分もあり、一部で自分の気持ちを優先させて相手を非難する言動が見られたり、助け合う場面が少ない。また、「どうせ自分なんて」と自己肯定感の低い生徒もいることが課題である。

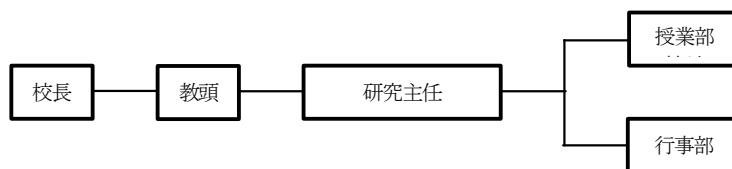
生徒の実態や地域社会の願いを踏まえ、生徒一人一人に「新しい時代を生き抜く力」「自らの人生を豊かに創造する力」を育てたいと思う。そのために、未来社会を切り拓くための資質・能力を基盤とした「生き抜く力」について、教科間での関連性を明らかにし、その教育効果をよりいっそう高めていきたい。

将来の変化を予測することが困難な時代に、生徒たちがよりよく成長することを心から願う。そのために、授業の振り返りの上に年間指導計画を修正し、カリキュラム・マネジメントの実践を通して、新しい時代を生きる生徒を育てたいと考え、研究テーマを「新しい時代を生き抜くたくましい生徒の育成ーカリキュラム・マネジメントの実践を通してー」と設定し、実践研究を行うこととした。

## 2 研究の経過

(1) カリキュラム・マネジメントについて理解し、教育目標（目指す子どもの姿）の共通理解を図る（グランドデザインの作成）。

- ① 学校の教育目標の実現に向けた現状の把握
  - ア 生徒についての現状分析（現状把握シート）
  - イ 学校の内部・外部環境の分析（SWOT分析シート）
  - ウ 学校の現状と課題の把握（カリキュラム・マネジメント検討用シート）
- ② 学校の特色づくりに向けた取組  
学校の現状・課題・将来像に基づいた学校経営の共有化  
（カリキュラム・マネジメント分シート）
- ③ グランドデザインの作成  
組織づくり



(2) 育成を目指す資質・能力と関連付けた授業改善

- ① 各教科等で育成を目指す資質・能力の検討  
（資質・能力の育成に向けたカリキュラム・マネジメントシート）  
（各教科でのカリキュラム・マネジメントシート）
- ② 育成を目指す資質・能力との関連を意識した授業実践

### (3) 学校の教育目標の実現に向けた取組

<研究1年目>

月	取組	項目番号
6月	自校の教育目標の実現に向けた現状把握シートの取組（全教職員実施） 現状把握のまとめ カリキュラム・マネジメント検討用シートの取組（学年主任・研究主任・管理職） カリキュラム・マネジメント検討用シートのまとめ	3(1)①ア 3(1)①ウ
10月	SWOT分析シートの取組（学年主任・研究主任・管理職） カリキュラム・マネジメント分析シートの作成（研究主任・校長）	3(1)①イ 3(1)②
11月	資質・能力の育成に向けたカリキュラム・マネジメントシートの取組（全教職員）	3(2)①
12月	グランドデザインの作成（研究主任・校長）	3(1)③
1月	教育に関するアンケート（全生徒・全保護者・全教職員） 教育に関するアンケートのまとめ（研究主任）	

<研究2年目>

月	取組	
4月	本年度の研究，グランドデザイン，カリキュラム・マネジメントについての共通理解（全教職員）	3(1)③
5月	自尊感情についての共通理解（全教職員） 自尊感情のアンケート（全生徒）	
6月	授業実践 3年 道徳科 研究授業（2回）	3(2)③オ
7月	道徳科 評価アンケート（全生徒） カリキュラム・マネジメント検討用シートの取組と研修会	3(3)②
10月	自尊感情のアンケート（全生徒） 授業実践 3年 道徳科 研究授業	

### (4) 評価・改善について

- ① 学校の教育活動全体を通じた取組の評価
- ② 「教育目標（目指す子どもの姿）に近づいているかどうか」の評価

## 3 研究の内容

### (1) 教育目標（目指す子どもの姿）の共通理解を図るための校内研修

- ① 学校の教育目標の実現に向けた現状の把握
  - ア 生徒についての現状分析（現状把握シート）

本研究1年目の年度始めの4月に教職員の異動があり，メンバーが変わった。そこで，今までの研

究の趣旨や流れについて共通理解し、自校の教育目標の実現に向けた現状の把握を行うために、全教職員それぞれで現状把握シートに取り組んだ。その結果をまとめたものを全教職員で共有した。この取組により「生徒の強み」「現在の生徒の実態」「生徒の弱み」「自校の生徒に付けさせたい資質・能力」について全教職員が把握をすることができた。本校の生徒の強みは「真面目な生徒が多く学力が高い」ところであり、弱みは「人間関係をうまくつくることができない」「考え方が幼く、自分本位な考えで行動してしまう」ところであることなどが分かった。

#### イ 学校内部・外部環境の分析（SWOT分析シート）

校長、教頭、学年主任3名と研究主任でSWOT分析シートに取り組んだ。異動してきた教職員は保護者のことや地域のことがまだよく分からない。そこで、本校に長く在籍し、各学年を客観的に捉えることができ、各学年の中心となって研究を進めることができる学年主任を中心にそれぞれのシートに取り組んだ。その結果、生徒、職員、校風、保護者などについて、強みとして働く場合と弱みとして働く場合について考えることができた。

プラス要因としては、「保護者は学校教育活動を好意的に支えてくれる」「生徒については学校文化が均一なので指導しやすい」「職員は自分のやりたい教育活動が行いやすい」「校風・伝統については小中合同運動会などみんなでまとまって一つのことに取り組める」ということがあげられた。

マイナス要因としては、「保護者は親の要求を満たせない教職員には厳しい」「生徒は生徒同士の関係が崩れると修正が難しい」「職員は生徒の学習意欲が高いので授業等の準備が大変である」「校風・伝統については生徒だけでやりたいことができない。転入生がすぐになじめない」ということがあげられた。

生徒が落ち着いていて指導しやすい環境を活用して全教職員で取り組み、生徒同士の関係が崩れると修正が難しいので、そうならない生徒同士の人間関係をつくっていきたいと考えた。

#### ウ 学校の現状と課題の把握（カリキュラム・マネジメント検討用シート）

さらに、研究に中心となって取り組んでいる、校長、教頭、学年主任と研究主任の6人でカリキュラム・マネジメント検討用シート（添付資料1）に取り組んだ。その結果、本校の教職員は、教育目標やカリキュラムのPDCAサイクルについては意識が高いが、組織の協力体制や時間の確保については若干意識が低いことが分かった。

#### ② 学校の特色づくりに向けた取組

学校の現状・課題・将来像に基づいた学校経営の共有化を図るため、カリキュラム・マネジメント分析シートに校長と研究主任で取り組み、現状分析をし、教育活動等のつながりや課題、改善等を考えた（添付資料2）。その結果、生徒や地域の実態、教育目標とカリキュラムのPDCAサイクル、教職員の組織についての影響や家庭・地域社会や教育行政との連携・支援について視覚的に把握することができた。本校では、教職員間で生徒についてよく話がされていて、情報が共有されている。校長がビジョンをはっきりと示しているが、教職員の経験と資質による差があり、個人によっては年間計画や教育目標をあまり意識できていない。以上のようなことが、教育目標に影響することが見えてきた。

#### ③ グランドデザインの作成に向けた取組

カリキュラム・マネジメント分析シートを基に、校長、研究主任で作成に取り組んだ。分析シートにはたくさんの情報があり、それをそのままグランドデザインにすると、どんなことが教育目標に関連しているか分かりづらくなる。共通理解しやすいように、できるだけ情報を焦点化して、関係がよく分かるようにすっきりとした形で作成を行った（添付資料3）。その後、学校経営案に掲載したり、

現職研修にて教職員に知らせたりして、学校の課題や学校の強みが学校目標・目指す生徒像にどうつながるかを共通理解できるように心がけた。

## (2) 育成を目指す資質・能力と関連付けた授業改善に向けた具体的な取組

### ① 各教科等で育成を目指す資質・能力の検討に活用した手法

(資質・能力の育成に向けたカリキュラム・マネジメントシート)

学校教育目標に近づけるために生徒にどんな力を身に付けさせたいか、またそのために現状の生徒に各教科でどのような力を身に付けさせるとよいかを、視覚的に分かりやすくイメージ図にまとめた(添付資料4)。各教科でまとめると学校教育目標につながる育てたい資質・能力として、「表現力、思考力、自立できる力、調整力、コミュニケーション力など」が考えられた。また、資質・能力の育成に向けたカリキュラム・マネジメントシートを全教職員で共有することで、若手教員等の経験の少ない教職員も自分の教科とそれ以外の教科とのつながりを意識することができた。

### ② 重点目標の焦点化

人間関係がうまくつけれないという生徒の現状から、自分の気持ちや考えを積極的に発表する「表現力」、自分の価値観だけでなくさまざまな考え方を取り入れることができる「思考力」、自分で考え、判断し、自分の言葉で語り、責任をもって行動できる「自立できる力」、他人を思いやる「調整力」、人間関係を構築する「コミュニケーション力」などの資質・能力の育成が必要ではないかと共通理解をした。

そこで、全教職員で「相手の立場や気持ちを理解できる心と自己の思いを伝える力を育成する」という学校全体の重点目標、それを受けての各学年の重点目標を意識して検討したところ、重点教科として「道徳」に取り組んでいくことにした。特に、「表現力、思考力、自立できる力、調整力、コミュニケーション力など」を育成するために、「考え、議論する道徳科」の授業を行うことにした(添付資料5)。他教科の授業も含めて、話し合い活動に重点的に取り組むことで、コミュニケーション力を高め、自己肯定感を高めようと考え、全教職員で取り組むことにした。

### ③ 育成を目指す資質・能力との関連を意識した授業実践

校長のリーダーシップの下、教育目標を達成できるように、後述の三つのカリキュラム・マネジメントを実践し、全教職員で教育活動に取り組んでいくことにした。

### ④ 1年目 平成30年度の取組

#### ア 教科等横断的な視点でのカリキュラム・マネジメント

平成29年度に作成した年間カリキュラムを基に、「話し合い」の力を身に付けさせるために各教科で重点的に取り組む単元を焦点化し教科等横断的に取り組んだ(資料3)。網掛けされた部分では、それぞれの目標達成のために「話し合い」を手だてとして行う学習場面がある。「話し合い」を意識して授業を行うことが、指導者側の「話し合い」に関する力量の向上を図ることができると考えた。授業が終わった後、授業の報告レポート(添付資料6)を職員間で共有し合い、「話し合い」についての具体的な手法について学び合った。



【写真1 保健体育科の授業での話し合いの様子】

【資料3 「話し合い」に焦点を当てた教科等横断的なカリキュラム・マネジメント】

1年																																												
月	4				5				6				7				9				10				11				12				1			2			3					
週	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44
国語	言葉に出会うために				学びをひらく				新しい視点へ				言葉をつなぐ				読書生活				つながりの中で				いにしえの心に触れる				論点を捉えて				読書に親しむ			自分を見つめて								
社会	地理 世界の姿				世界各地の人々の生活と環境				歴史 古代までの日本				地理 世界の諸地域				世界のさまざまな地域の調査				歴史 中世の日本				地理 日本の姿																			
数学	正の数・負の数								文字の式				方程式				変化と対応				平面図形				空間図形			資料の活用																
理科	植物の世界 (植物のつくりと分類)								身のまわりの物質 (個体・液体・気体の物質と状態変化)								身のまわりの現象 (光・音・力)								大地の変化 (地震・火山・地層)																			
英語	Unit0,1,2 be動詞				Unit3 一般動詞				Unit4 複数形				Unit5 Whatを用いた文				Unit6 3人称単数形				Unit7,Unit8 疑問詞				Unit9 現在進行形				Unit10 Can			Unit11 過去形			まとめ			Let's Read.						
音楽	表現 校歌「青空へのほろろ」等				鑑賞 「魔王」				表現(創作) 「音のスケッチ」等				表現 「夏の思い出」等				表現 「明日への勇氣」等				表現 「ソーラン節」				表現 「海が明けるよ」				鑑賞 「フルタバ」			鑑賞表現(創作) 箏曲「六段の調」			表現鑑賞 「四月のいのちの歌」									
体育男子	体づくり		陸上競技				相撲		水泳		ソフトボール				器械運動				バレーボール				ダンス			サッカー																		
	理論								保健		保健								理論				保健																					
体育女子	体づくり		器械運動				バレー		水泳		ダンス				陸上競技				ソフトボール				サッカー			剣道																		
	理論								保健		保健								理論				保健																					
美術	絵・彫刻 見て感じて、描く		鑑賞 デザイン・工芸 楽しく伝える文字のデザイン				鑑賞 デザイン・工芸 美しい構成と装飾		絵・彫刻 材料と対話して				絵・彫刻 なぜか気になる情景				鑑賞 身近な人を見つめて				デザイン・工芸 記憶に残るシンボルマーク				デザイン・工芸 暮らしに息づく木の命			絵・彫刻 心に残ったできごと																
技術	ガイダンス		材料と加工法				製作品の設計と製作①				製作品の設計と製作②				製作品の設計と製作③				材料の加工に関する技術の評価・活用			デジタル作品の設計製作																						
家庭	ガイダンス		食生活と栄養				献立作りと食品の選択				調理と食文化				生活の課題と実践				調理と食文化			わたしたちの消費生活																						

イ 教育内容の質の向上を目指すカリキュラム・マネジメント

保健体育科では、技能に差のある生徒がともに学び合うことの重要性「異質協同の学び」が提唱されている。生徒は「できる」「分かる」にかかわらず、お互いに観察し合い、分析し合い、教え合うことによって、それぞれの「分かる」を高めていくのである。また、男女別々に学ぶことより、男女ともに学ぶことの方が多面的で多様な考え方に触れることができる。以上のことにより、保健体育科の授業を男女共修で行うこととした(資料4)。

【資料4 2年体育カリキュラムの変容】

教科 体育(男子)																																												
月	4				5				6				7				9				10				11				12				1			2			3					
週	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44
2年	体づくり		陸上競技				相撲		水泳		ソフトボール				器械				バスケットボール				ダンス			フラグ																		
	理論								保健		保健								理論				保健																					
教科 体育(女子)																																												
月	4				5				6				7				9				10				11				12				1			2			3					
週	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44
2年	体づくり		器械運動				ソフトボール		水泳		ダンス				陸上競技				剣道				バスケットボール			フラグ																		
	理論								保健		保健								理論				保健																					
教科 体育(男女)																																												
月	4				5				6				7				9				10				11				12				1			2			3					
週	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44
2年	体づくり		陸上競技				武道		水泳		ベースボール型				器械運動				ネット型				ゴール型			ダンス																		
	理論								保健		保健								理論				保健																					



武道の単元は、今までは男子は相撲、女子は剣道の授業であった。男女が同時に、安全を確保して学ぶという視点から、武道一般の共通項である受け身の練習を授業で行うこととした。体育館で体操用のマットを用意して、前受け身、横受け身、後ろ受け身、前回り受け身の練習を行った。



【写真2 抜き技練習の様子】

次に、最近の物騒な事件への対応から、護身術の技を男女で学ぶこととした。手首や腕を捕まれたときの抜き技から始め、柔術や合気道にある小手技の基本的な投げ技を行った。これらは、安全に行うことが可能な上、道具も必要がないことから全員一斉に行うことができ、男女で一緒に学ぶこともできた。その後、相撲の原理を説明し、相手の腰を折る動きや腕を上げたり肘を制したりすることで力を出させないことを、実技を通して学んだ。武道の基礎となる受け身や抜き技など、実用的で簡単な技を男女共修で無理なく学ぶことができた。この男女共修は次年度も継続して行っている。

#### ウ 地域との連携を見据えたカリキュラム・マネジメント

今まで総合的な学習の時間に行われてきた救命講習会を保健体育科の授業の中で行った。養護教諭と協力して行うことで学習内容の重複を防ぐことができた。



【写真3 救命講習会の様子】

保健体育科の「傷害の防止」の単元には、心肺蘇生の項目がある。心肺蘇生法、AEDの使用方法を身に付けておくことは救命ということからとても大切である。しかし、いざというときに心肺蘇生、AEDを使うことができなければ意味がない。そこで、講義だけではなく専門家である消防署の方を講師として招き、心肺蘇生法・AEDの使い方を学ばせ、実践力を養わ

せたいと考えた。生徒は、梅雨が明けると水泳学習も始まり、休みには海等へも出かけることもある。本来後期に予定されている心肺蘇生の授業内容を、学習効果をより高めるために時期の変更を行い実施した。

#### ⑤ 1・2年目 平成30～令和元年度の取組

##### ア 道徳の授業実践（1年目）

本校の生徒は小学校から9年間同じメンバーで過ごすため、人間関係が固定化されてしまうことがある。そのため、卒業後に新しい環境で人間関係をうまくつくることのできない生徒もいる。また、現状把握シートからも、他者とのコミュニケーションの回り方が苦手であることが分かり、特に「話し合い」に着目した道徳について研究を進めていくことにした。

研究1年目の4月に「話し合いの学習活動を指導するときに気を付けていること」についてのアンケートを全教職員に行った。アンケートに挙げられた結果を教職員で共有した後、永和中学校としての「話し合い」について、統一してまとめた。今後、永和中学校の中で「話し合い」は、その内容を意識して行われていることを示している（資料5）。

## 【資料5 永和中としての「話し合い」について統一事項】

### 永和中としての「話し合い」について統一事項

#### 生徒がすること

以下の1～3について、生徒が真面目に取り組むように指導する。

- 1 話をしっかり聞くこと
- 2 互いを尊重する態度をとること
- 3 ていねいな言葉で話をすること

#### 教員がすること

以下の1～5について、生徒を学習の目的に応じて組織し、調整していく。

- 1 グループの構成（男女混合、4名、市松模様）
- 2 話す視点を明らかにする（テーマ、自分の考えを書かせてから話し合う等）
- 3 隊形の指示（コの字型、生活班）
- 4 役割の指示（司会、記録、発表）
- 5 話し合ったことの指示（発表、内省）

この統一事項を用いて話し合い活動を行うことで、コミュニケーションをとる経験を重ね、生徒たちは自他を認め合い、自己肯定感が高くなると考えた。

現職研修として講師を招き、道徳講習会を行った。そこで、「人によって価値観は違うのだから、授業の中でそれぞれの価値観を出し合うことが大切である。そうすることが人の価値観に触れることにつながる。その結果、心の中にさまざまに湧き起こるものが学びである」という道徳科における学びについて、学習を深めることができた。

また、生徒の言葉を引き出すためには、「うなずき、あいづちを豊富にする」「子どもが話した言葉・文言・キーワードを伝え返す」「聴く位置、姿勢が大切である」等、話の聴き方がポイントとなることや「教材となる話には、起承転結があり、主発問をつくるときは、転の部分を取り扱おうとよい」という主発問のづくり方を学んだ。

その後、道徳の授業実践を更に重ねた。授業実践をしたことによって、以下の2点について学ぶことができた。

1点目は、「発問について」である。発問については、道徳講習会で発問のづくり方を学んだが、「道徳的価値観に結び付けることがうまくできずに、生徒の言葉を引き出すことができなかった」という反省が挙げられた。また、道徳的価値観を意識して授業を考えると、「ある程度誘導するような言葉がけになってしまっている気がするので、言葉を引き出す方法を考えていきたい」との言葉が挙げられた。

2点目は、「場の雰囲気について」である。場の雰囲気についても道徳講習会で、生徒の言葉を引き出すためには、いかにして場の雰囲気を整えていくのが大切であると学んだ。教室の雰囲気を整えるには、道徳科の授業のみならず、担任による日頃からの学級経営により、安心して発言できると思える環境ができているかにかかっている。

2点とも道徳講習会で学んだことであるが、「分かること」と「できること」は違うということを改めて実感することとなった。



「話し合い」について焦点を当てたカリキュラム・マネジメントによって、指導者と学習者に話し合いを行う力が身に付いていった。その結果、生徒たちはより深い議論ができるようになり、より質の高い授業が展開されるようになっていった。さらに、話し合い活動による生徒同士の言葉の交流の結果、互いを認め合うことができる場面が増えたために、徐々にではあるが生徒の自己肯定感が上昇していった。

#### イ 道徳の授業実践（2年目）

研究2年目も引き続き、「話し合い」に着目した道徳科の研究に取り組んだ。1年目の終わりの学校評価では、保護者と生徒に同じ「部活動に真面目に取り組んでいるか」というアンケートをとった。7割を超す保護者は「そう思っている」と回答したが、生徒は「そう思っている」と回答した割合が5割程度であった。他から見ると取り組んでいるが、生徒はそう思っておらず、自信をもてていないということが考えられる。

研究1年目、物事を自分事として捉え、話し合いの中で自分の考えや思いを自分の言葉で伝えることができるようになった生徒が増えた。しかし、話し合い活動を通して、自己肯定感が上がった生徒と、下がった生徒の両極化が見られた。これは、話し合い活動による生徒同士の交流で自分の意見が認められた生徒がいた一方、話し合いにうまく入れなかった生徒や、話し合い活動の中で自分の考えが認められなかった生徒もいたからだと思われる。

そこで、研究2年目は、生徒が発言しやすい雰囲気をつくり、発言を促す働きかけをすることで、自分と異なる価値観にたくさん出合わせる必要があると考えた。また、多様な価値観に出合わせ、話し合い活動を行わせることで、より相手の立場や気持ちを尊重した話し合い活動につなげ、生徒の自己肯定感を上げていきたいと考えた。

#### (ア) 「話し合い」について

研究1年目に作成した「話し合い」についての統一事項の内容を意識させて「話し合い」の授業を進める。また、研究のねらいに迫るためには、統一事項の中の「2 話す視点を明らかにする」が特に重要だと考える。話し合い活動を通して自己の思いを伝え、相手の立場や気持ちを理解するためには、生徒一人一人が考えをもって「話し合い」に参加する必要があるからである。その手段として、発問を短くしたり、簡単な言葉を使ったりすることで、発問の意図を明確にすることを学校全体で行った。

#### (イ) 研究授業及び「生徒の発言を促す教師の働きかけ」についての研修

本校では、6月に講師を招き、第3学年において、「きみがいちばんひかるとき」にある教材名「二通の手紙」、内容項目「C-6 遵法精神、公德心」の研究授業を行った。また、同日の午後には、研究授業の協議会も行った。協議は、研究授業において見いだされた三つの課題を中心に進められた。

一つ目の課題は、話し合い活動に参加させる前にワークシートに考えを書かせたことで、話し合い活動の途中で考えが変わっても、ワークシートに記入した初めの考えを生徒が発言してしまったことである。授業者としては、話し合い活動の前にワークシートに自分の考えを書かせ、明確にさせることで、生徒が安心して話し合い活動に参加できることをねらいとした。実際、話し合い活動において、多くの生徒は自分の意見を堂々と発表することができた。しかし、生徒は話し合い活動を通して考えが変わっているのに、ワークシートにまとめた初めの考えをそのまま発表していたのである。その結

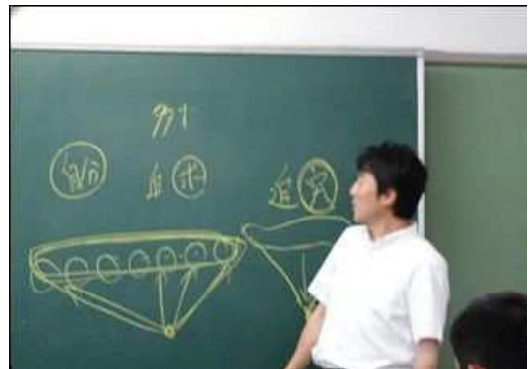
果、話し合い活動において、生徒の考えの変化を授業で取り上げることができなかった。

二つ目の課題は、小グループでの話し合い活動において、各グループ内で出された意見を全体で十分に広げることができなかったことである。生徒一人一人が自信をもって自分の考えを発表することができるよう、全体での意見発表を行う前に、グループ内で順番に意見を発表させる活動を設定した。その結果、指名された生徒は全体の間でも、自分の意見をはっきりと発言することができた。しかし、内容の濃い話し合い活動ができたグループと、そうでないグループに二極化してしまった。そして、各グループで行われた話し合い活動の内容を、全体で共有させることなく授業が終わってしまった。



【写真4 小グループでの話し合い活動の様子】

三つ目の課題は、考えを深めさせるための揺さぶりや切り返しの発問を教師がうまくできず、似たような意見がほとんどで、多様な意見が出てこなかったことである。これは、登場人物の心情や状況を軸にした授業展開であったために、多くの価値観に出合わせることができなかったから



【写真5 午後の協議会の様子】

だと思われる。多面的・多角的な視点で考えさせるような授業者の発問があれば、生徒により多くの価値観に出合わせ、活発な話し合い活動を行わせることができたのではないかと考える。

また、協議会の後半では、外部講師から道徳科の授業について指導をしていただき、その要点をまとめた(資料6)。

#### 【資料6 道徳講習会での内容】

- 道徳は、「道徳的価値の理解」、「自分事として意見が言えるか」、「(他人の意見を聞いて) 多面的・多角的にとらえられるか」が大事である。
- 発問はきっかけの1つで、一人の意見からいかに次の生徒の意見を引き出すかが重要である。
- 生徒の言葉を引き出す手段の1つとして、反応の仕方が重要である。「なるほど」という一言でも、間の取り方やトーン次第で生徒の受け取り方が変わってくる。
- 板書は意見のショートカットキーであり、省略して書く。それを見れば、意見が思い出せるようにする。
- 道徳は、その人の中で考えれば考えるほど価値観が増える。他人の意見を自分事として多面的・多角的に考えさせることで、たくさんの価値観をもたせ、揺さぶることが大切である。

#### (ウ) 2度目の研究授業について

2週間後、名古屋大学大学院教授 柴田好章氏を講師に招いて、3年生の別の学級においても、「二通の手紙」の研究授業を行った。前回の研究協議会で出された課題を踏まえ、次の3点に留意して授業実践を行った。以下が、前回の課題である(資料7)。

#### 【資料7 前回の授業研究で挙げられた課題】

- 課題1 話し合いに参加させる前にワークシートに考えを書かせたことで、話し合い活動の途中で考えが変わっても、ワークシートに記入した初めの考えを生徒が発言してしまった。
- 課題2 小グループでの話し合い活動において、各グループ内で出された意見を全体の間で十分に広げることができなかった。
- 課題3 考えを深めさせるための揺さぶりや切り返しの発問がうまくできず、似たような意見がほとんどで、多様な意見が出てこなかった。

まず、課題1を解決するために、ワークシートへの記入を話し合い活動後とした。その結果、他の

生徒の考えを聞いて更新された考えや、考えが変わった理由が話し合い活動中に生徒から出され、より活発な意見交換の場とすることができた。特に、考えが変わった理由を発表させることで、その生徒の価値観の変容を全体場で共有し、他の生徒の考えを更新させたり、新たな考えを生み出させたりする機会を増やすことができた。また、話し合い活動の感想をワークシートに書かせたことで、生徒が話し合い活動で生じた自分の考えの変化を振り返り、自分の学びを整理することができた（資料8）。

#### 【資料8 話し合い活動の中で考えが変わった生徒のワークシート】

最初 は こ く ら い で、 と い う こ も 思、 て い た け ど、  
話 を 聞 い て 規 則 は 大 事 だ と い う こ と に 気 付 か さ れ た、

次に、課題2に対する改善策として、授業者が生徒の発言を繰り返したり、うなずいて共感する姿勢を見せたりすることで、発言しやすい雰囲気を生み出すことを心がけた。また、小グループでの話し合いやワークシートへの事前の記入は行わなかった。それを行わなくても、生徒が安心して発言することができる雰囲気をつくることできれば、生徒からさまざまな考えを引き出すことができると考えたからである。実際に一度目の研究授業と比べて、生徒の発言は多くなった。さらに、小グループでの話し合いを行わず、その時間を全体での話し合い活動としたことで、小グループでの話し合いの内容を全体に広げる必要がなくなった。このことから、課題2の改善につながったと考えられる。

課題3に対しては、全体での話し合い活動の際、多面的・多角的に考えさせる切り返しの発問を行うことを改善策とした。実際の授業では、元さん以外の人物の視点から元さんの行動について考えさせたり、自分ならどのような行動をするか考えを発表させたりした。その結果、多様な視点からの考えや、同じ視点からでもさまざまな異なる意見が出てきた。一度目の研究授業と比べて、生徒に多様な価値観に出合わせることができた。しかし、切り返しの発問がうまくいかなかったときは、生徒の意見を全体場で掘り下げることができず、単発で終わってしまうこともあった。そのため、一人の生徒の発言を全体で掘り下げ、広げることができるような働きかけを行っていくことが次への課題であると考えられる。



【写真6 発問に対する生徒の挙手の様子】

### (3) 育成を目指す資質・能力の視点からの評価・改善の取組

#### ① 学校の教育活動全体を通じた取組の評価

平成31年度の異動で、前年度より約3分の1の職員が入れ替わった。そこで、現職研修にて前年度本校が取り組んできた研究についてやグランドデザイン、カリキュラム・マネジメントについて共通理解を図った。

また、研究1年目はカリキュラム・マネジメント検討用シートを本校に長く在籍し、各学年を客観的に見ることができ、各学年の中心となって研究を進めることができるという理由から、校長、教頭、学年主任、研究主任などの少人数で検討し、研究に取り組んできた。しかし、どうしても一部の職員で取り組んでいるという意識が感じられ、研究2年目はそれを全教職員に広げ、教職員の意識の改善

を図り、全員で研究を進め、生徒を育てていこうと考えた。

さらに、各教科で教育目標達成に向けて授業で行っている工夫について、個人でレポートにまとめた（添付資料7）。教科により手法はさまざまであるが、生徒の強みや弱みを意識した工夫をまとめることができた。レポート作成に取り組むことで、教職員の当事者意識を高めることができた。また、そのレポートを現職研修などで共有し、目標を意識して取り組むことの大切さを共通理解した。

② 「教育目標（目指す子どもの姿）に近づいているかどうか」の評価

本校の教育目標の一つに「自他共に『命』を最大限に尊重し、心温かい生徒の育成」がある。しかし、本校の生徒の特徴として、「どうせ自分なんて・・・」と自己肯定感の低い生徒もいる。道徳の研究を通して話し合いを行い、自己肯定感を高めようと取り組んできた。ここで、全校生徒に行ったアンケートを基に成果を考察していきたい。

永和中学校において令和元年度5月、7月、12月に行われた、話し合い活動に関するアンケート結果をまとめたものである（資料9）。

【資料9 5月・7月・12月に行った話し合い活動に関するアンケート結果の比較】

アンケート項目												
ア 話し合い活動を通じて、自分の考えを伝えることができる。												
イ 話し合い活動を通じて、自分の考えを伝えることに自信をもつことができる。												
ウ 話し合い活動を通じて、他の生徒の気持ちや考えをしっかりと聞くことができる。												
エ 話し合い活動を通じて、他の人の気持ちや考えを受け止めることができる。												

解答 質問	1（そう思う）			2（少しそう思う）			3（あまりそう思わない）			4（そう思わない）		
	5月	7月	12月	5月	7月	12月	5月	7月	12月	5月	7月	12月
ア	33.5	39.2	43.5	48.3	46.4	44.9	14.8	13.4	11.7	3.3	1.0	0.0
イ	21.5	25.4	26.8	45.0	48.3	54.5	25.4	23.0	16.9	8.1	3.3	1.9
ウ	59.8	68.9	73.4	36.8	29.2	24.8	2.9	1.9	1.9	0.5	0.0	0.0
エ	51.7	61.7	65.4	40.2	33.5	31.8	7.2	4.8	2.8	1.0	0.0	0.0

数字は%

まず、5月、7月、12月のアンケート結果を比べると、研究が進むにしたがって全ての質問項目に対して、「3（あまりそう思わない）」、「4（そう思わない）」と答えた生徒が減少し、「1（そう思う）」、「2（少しそう思う）」と答えた生徒が増加した。質問アとイの結果から、生徒は話し合いの場面で自分の考えを伝えることができ、更にそのことについて自信をもつことができるようになってきた。また、質問ウとエの結果から、他の生徒の気持ちや考えをしっかりと聞くことができ、気持ちを受け止めることができる生徒が増加していることが分かる。道徳の話し合いを通していろいろな価値観に出合わせることで、相手の立場や気持ちを尊重し、自己肯定感を高めるという本研究の仮説に対する手だてには、一定の効果があつたと言える。

しかし、12月の質問イの結果を見ると、5月、7月、12月と少しずつよくなっているものの、全体の約5分の1の生徒が「自分の考えを伝えることに自信をもっている」ことに対して、「3（あまりそう思わない）」、「4（そう思わない）」と答えている。本研究の取組では、自分の考えを伝えることに不安を感じる生徒への支援として不十分だったと言える。

以上より、6月に改善した道徳科の授業での取組を継続し、長い期間での成果を検証していくとともに、生徒が自信をもって自分の考えを伝えることができるよう、指導者側が授業を工夫していく必要があるという共通理解を図ることができた。

#### 4 カリキュラム・マネジメントの取組の成果と課題

##### (1) 当事者意識の高まり

【資料10 カリキュラム・マネジメント検討用シートの結果】

要素	項目	7月平均	12月平均
ア 教育目標	1 学校全体の学力傾向やその他の実態、課題について、全教職員が共有している。	3.18	3.24
	2 学校の教育目標や重点目標は、生徒や地域の実態を踏まえて設定されている。	3.47	3.41
	3 学校の教育目標や重点目標には、「生徒に身に付けさせたい力」や「めざす生徒像」が具体的に記述されている。	3.65	3.59
P D C A P (計画)	4 学校経営案や学年・各教科の指導計画等に示す目標や内容等は、それぞれが連動するよう作成されている。	3.18	3.24
	5 学校経営案や学年・各教科の指導計画等に示す目標や内容の相互関連が一目でわかるような全体計画や年間指導計画が作成されている。	3.24	3.29
	6 学習成果の評価(規準や方法、時期など)について、年度当初に計画している。	3.24	3.35
P D C A D (実施)	7 多くの教職員が、学校の教育目標や重点目標を意識して授業や行事に取り組んでいる。	3.00	3.24
	8 多くの教職員が、学年・各教科等に示す目標や内容の相互関連を意識して、日々の授業を行っている。	2.94	3.18
	9 多くの教職員が、既習事項や、先の学年で学ぶ内容との関連(系統性)を意識して指導している。	2.88	3.35
P D C A C (評価)	10 多くの教職員が、学校の年間指導計画の改善に役立つような記録(メモ)を残している。	2.65	2.82
	11 生徒の学習成果の評価だけでなく、授業の評価も行なっている。	2.65	2.82
	12 学校として取り組んでいる授業研究が学校の課題解決に役立っているかについて評価している。	2.82	3.06
P D C A A (改善)	13 年間学習指導計画の反省等を、次年度に向けた改善につなげている。	2.88	3.12
	14 定期テストや全国学力状況調査等の分析結果を参考に、対象学年だけでなく学校全体の指導計画を見直し、改善している。	3.06	3.12
	15 定期テストや全国学力状況調査等の分析結果を参考に、対象学年だけでなく学校全体の具体的な指導法を見直し、改善している。	2.94	3.12
	16 多くの教職員は、学校の授業研究の成果を日常の授業に積極的に生かしている。	3.12	3.47
ウ 組織構造(人・物・財・組織と運営・時間・情報など)	17 教育課程の編成、評価や改善に全教職員が関わっている。	2.76	2.82
	18 必要な研究や研修ができるよう時間確保への配慮がなされている。	2.71	2.82
	19 教職員が、他校や研修機関など学校外での研修に参加できるように支援されている。	2.59	3.12
	20 教員以外のスタッフ(ALT・SC・学校司書等)と連携協力している。	3.18	3.47
エ 組織文化(カリキュラム文化・組織文化・個人的価値観)	21 多くの教職員が、学校として力を入れている実践(特色)を具体的に説明できる。	2.76	2.94
	22 多くの教職員に、自己の知識や技能、実践内容を相互に提供しあう姿勢がある。	3.00	3.00
	23 多くの教職員が、学級や学年を越えて、生徒の成長を伝えあい、喜びを共有している。	3.24	3.47
	24 多くの教職員に、自分の担当学年・教科だけでなく、学校の教育課程全体で、組織的に生徒を育てていくという意識がある。	3.12	3.31
オ リーダーシップ	25 校長は、教育と経営の全体を見通し、ビジョンを示している。	3.71	3.59
	26 教頭は、ビジョンの具体化を図るために、学校として協働して取り組む体制や雰囲気づくりに尽力している。	3.24	3.18
	27 主任や中堅教員は、ビジョンをもとにカリキュラムの工夫や研究推進の具体策を示して実行している。	3.29	3.00
	28 多くの教職員が、立場や役割に応じてリーダーシップを発揮している。	3.29	3.24
カ 家庭・地域社会等	29 学校の教育の成果と課題を保護者・地域と共有し、共に解決策を考えたり行動したりする機会がある。	2.94	3.00
	30 教育活動のために、図書館・大学・企業等の外部機関を積極的に利用している。	2.35	2.82
キ 教育行政	31 多くの教職員が、地域の人材や素材を積極的に活用している。	2.35	2.53
	32 指導主事等の訪問の機会を積極的に活用している。	2.35	2.88
	33 多くの教職員が、国や教育委員会主催の研修に参加している。	2.41	2.29
	34 国や都道府県・市町村が提供している資料等を活用している。	2.24	2.59

2年目の7月と12月に全教職員でカリキュラム・マネジメント検討用シートに取り組んだ。各項目の最大値は4で、アンケート結果を集計し、ポイントの平均値で比較した(資料10)。それを見ると、34項目中の27項目、約80%の項目について12月にかけてポイントの維持・上昇が見られ、教職員の意識が向上していることが分かる。特にカリキュラムのP D C Aサイクルに関する項目は全てポイントが上昇している。また、項目1「学校全体の学力傾向やその他の実態、課題について、全教職員が共有している」や項目21「多くの教職員が、学校として力を入れている実践(特色)を具体的に説明できる」もポイントが上昇していることから、全教職員が意識をして研究に取り組むことができたと考えられる。

研究1年目は研究を少人数が主導し行っていたものを、改善のために研究2年目は全教職員で研究について共通理解を図り、「話し合い」に着目した道徳の研究を続けてきた。前述したように、全校生徒に行ったアンケートによると、「自分の考えを伝えることができている」「自分の考えを伝えることに自信をもつことができている」「他の生徒の気持ちや考えをしっかりと聞くことができている」



「他の人の気持ちや考えを受け止めることができている」の全ての項目について、「そう思う」「少しそう思う」と答えた生徒が増えている。これは、全教職員が意識をして研究に取り組んだことにより、生徒の変化につながったと考える。しかし、まだまだ自信をもてていない生徒も少なからずいる。今後も継続して実践に取り組んでいきたい。

#### (2) 教育目標（目指す子どもの姿）を共有

各個人で教育目標に迫るための授業を工夫することで、学校教育目標にある生徒像に向けて、毎時間の授業を意識し、それぞれの立場でできることを組織的に意識的にこれからも取り組んでいきたい。

#### (3) 重点目標の焦点化

本校では平成29年度より研究を進めており、その実践を振り返って教育目標や重点目標を見直している。各個人が学校教育目標のねらいを意識しながら、それぞれの教科の授業を行うことで、生徒たちが少しずつ変化してきた。

#### (4) 主体的・対話的で深い学びの視点に立った授業改善

「話し合い」について焦点を当てたカリキュラム・マネジメントを行い、各教科等で横断的に行うことで、話し合う機会が増え、話し合う力が身に付いていった。

道徳科の研究授業を行ったことで、多様な考えを発言させ、話し合い活動を活発化させる教師の働きかけについて学校全体で考え、その後の道徳科の授業で生かすことができた。

#### (5) 授業研究、評価データを基にしたカリキュラム改善

全教職員で教科の特性を意識し、年間カリキュラムを表にまとめることで、各教科のつながりを意識することができた。また、カリキュラム・マネジメントを行うときに大いに役立った。

「教科等横断的な視点でのカリキュラム・マネジメント」では、「話し合い」に着目した道徳に取り組んだ。その結果、全教職員が「話し合い」という共通項をもって道徳の授業に取り組むことができた。

「教育の質の向上を目指すカリキュラム・マネジメント」では、保健体育科の授業の男女共修に取り組んだ。男女共修の学習内容を検討したことで、学校教育目標達成というねらいに向け、教材研究を進めることができた。

「地域との連携を見据えたカリキュラム・マネジメント」では、地域の消防署の協力を得て、心肺蘇生の講習を行った。学校だけで指導を行うよりも、より専門的な知識と技能を生徒に身に付けさせることができた。

## 5 まとめ

本校の研究では、全校体制の研究を行っていくために、共通したテーマを設定することにした。全教職員が関わるができる「話し合い」に着目をして、道徳の授業を行っていくこととしたのである。

また、個人の立場でも研究を進めていくことができるように、保健体育科の教科としての視点、養護教諭として教科外の視点からの実践を行っていった。

研究を進めるに当たり、学校教育目標が重要であることを、実践を通して知ることができた。この学校教育目標にある生徒像に向けて、毎時間の授業の中で学校教育目標を意識していくということが大切なことである。この毎日の積み重ねの姿こそがカリキュラム・マネジメントなのである。肝心なことは、教育目標達成のために、それぞれの立場でできることを組織的に意識的に行っていくことである。

【添付資料1】 授業改善に向けたカリキュラム・マネジメント検用シート（愛西市立永和中学校）

質問 学校の教育目標はどのくらい実現されていますか。  
 ( ) 4 期待以上の成果が出つつある ( ) 3 おおむね予定どおり成果が出つつある  
 ( ) 2 あまり成果が出ていない ( ) 1 ほとんど成果が出ていない

本シートを活用して、カリキュラム・マネジメントの全体像（構成要素と要素間のつながり）を理解するとともに、勤務校の実践について、よさや課題、改善方を考えていきます。まず、カリキュラム・マネジメントの基本的な実践の状況について勤務校の実態を評価してください。下表の「要素」は、「分析シート」内の各要素に対応しています。「項目」は各要素を代表するような具体的な実践項目の例です。4段階で評価し、「評価できる点」、「改善が必要な点」、「解決策」等を書き込んでください。

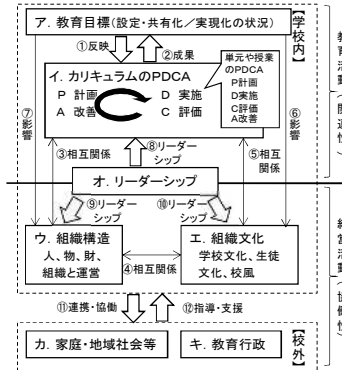
要素	項目	評価			備考
		4	3	2	
ア 教育目標 3.66(+)	1 学校全体の学力傾向やその他の実施、課題について、全教職員が共有している。	3.3			○生徒の様子をよくつかんでいる。
	2 学校の教育目標や重点目標は、生徒や地域の実態を踏まえて設定されている。	3.7			
	3 学校の教育目標や重点目標には、「生徒に身に付けさせたい力」や「めざす生徒像」が具体的に記述されている。	4.0			
カリキュラムのPDCA P(計画) 3.50(+)	4 学校経営案や学年・各教科の指導計画等に示す目標や内容等は、それぞれが連動するよう作成されている。	3.5			○生徒の様子をよくつかんでいる。
	5 学校経営案や学年・各教科の指導計画等に示す目標や内容の相互関連が一目でわかるような全体計画や年間指導計画が作成されている。	3.5			
	6 学習成果の評価（規準や方法、時期など）について、年度当初に計画している。	3.7			
カリキュラムのPDCA D(実施) 2.80(+)	7 多くの教職員が、学校の教育目標や重点目標を意識して授業や行事に取り組んでいる。	2.8			▲経験の長短によって系統性の理解に差があるように思われる。 ▲個人によっては学校の教育目標などをほとんど意識していない現状がある。 ▲教科の異なるつながりは意識できていない。
	8 多くの教職員が、学年・各教科等に示す目標や内容の相互関連を意識して、日々の授業を行っている。	2.7			
	9 多くの教職員が、既習事項や、先の学年で学ぶ内容との関連（系統性）を意識して指導している。	3.0			
カリキュラムのPDCA C(評価) 2.43(-)	10 多くの教職員が、学校の年間指導計画の改善に役立つような記録（メモ）を残している。	2.3			▲授業研究はあるが、1時間内のことに過ぎず学校の課題解決という視点では行われていない。
	11 生徒の学習成果の評価だけでなく、授業の評価も行なっている。	2.5			
	12 学校として取り組んでいる授業研究が学校の課題解決に役立っているかについて評価している。	2.5			
カリキュラムのPDCA A(改善) 3.02(+)	13 年間学習指導計画の反省等を、次年度に向けた改善につなげている。	3.0			○複数学年を担当している教員の動きが結果として学校全体の指導計画の改善という形になっているところもある。 ○生徒の資質が高いことは周知の事実なので、生徒が満足できるレベルの設定が重要かと思う。 ○年間計画では、次年度に向けてスムーズに動けるよう細やかな修正が行われている。 ▲改善の記録が職員の負担などで学校全体として生かされていないと思う。
	14 定期テストや全国学力状況調査等の分析結果を参考に、対象学年だけでなく学校全体の指導計画を見直し、改善している。	3.3			
	15 定期テストや全国学力状況調査等の分析結果を参考に、対象学年だけでなく学校全体の具体的な指導法を見直し、改善している。	3.0			
	16 多くの教職員は、学校の授業研究の成果を日常の授業に積極的に生かしている。	2.8			
組織構造（人・物・財・組織と運営・時間・情報など） 3.12(+)	17 教育課程の編成、評価や改善に全教職員が関わっている。	2.8			○校長先生の回復措置への配慮がしっかりしている。 ○特にSCを有効利用している。
	18 必要な研究や研修ができるよう時間確保への配慮がなされている。	2.7			
	19 教職員が、他校や研修機関など学校外での研修に参加できるように支援されている。	3.2			
	20 教員以外のスタッフ（ALT・SC・学校司書等）と連携協力している。	3.8			

要素	項目	評価			備考
		4	3	2	
エ 組織文化（カリキュラム文化・組織文化・個人的価値観） 3.07(+)	21 多くの教職員が、学校として力を入れている実践（特色）を具体的に説明できる。	2.8			○生徒の成長に関して喜び歓迎する雰囲気全体にある。 ○生徒情報と対応の共有は十分できていると思う。 ▲これらの内容を教職員同士十分に共有できていないもどかしさがある。 ▲組織としてチームで動く意識が薄い部分がある。
	22 多くの教職員に、自己の知識や技能、実践内容を相互に提供しあう姿勢がある。	2.8			
	23 多くの教職員が、学級や学年を越えて、生徒の成長を伝えあい、喜びを共有している。	3.7			
	24 多くの教職員に、自分の担当学年・教科だけでなく、学校の教育課程全体で、組織的に生徒を育てていくという意識がある。	3.0			
リーダーシップ 2.92(+)	25 校長は、教育と経営の全体を見通し、ビジョンを示している。	3.7			○教務主任が中心となって牽引している。 ▲感力しているつもりだが、成果は目に見えていないように感じる。 ▲報・連・相が不足しており、知らないことが多い。 ▲個人によっては面倒なこと多いとい、実行に移すことができないものがある。 ▲一般教員は経験と資質による差がかなり大きい。
	26 教頭は、ビジョンの具体化を図るために、学校として協働して取り組む体制や雰囲気づくりに尽力している。	3.0			
	27 主任や中堅教員は、ビジョンをもとにカリキュラムの工夫や研究推進の具体策を示して実行している。	2.8			
	28 多くの教職員が、立場や役割に応じてリーダーシップを発揮している。	2.2			
家庭・地域社会等 3.13(+)	29 学校の教育の成果と課題を保護者・地域と共有し、共に解決策を考えたり行動したりする機会がある。	3.2			○国内外の大学関係者との交流をしている。 ○PTA役員を通しての情報交換が行われている。 ▲学校からの情報提供はしているが、解決策を考える機会を得るのは難しい。
	30 教育活動のために、図書館・大学・企業等の外部機関を積極的に利用している。	3.2			
キ 教育行政 2.46(-)	31 多くの教職員が、地域の人材や素材を積極的に活用している。	3.0			▲指導主事が学校を訪問する機会が少ない。 ▲研修に行けば他の日に授業が振り分けられ、多忙が進む傾向がある。
	32 指導主事等の訪問の機会を積極的に活用している。	3.8			
	33 多くの教職員が、国や教育委員会主催の研修に参加している。	2.8			
	34 国や都道府県・市町村が提供している資料等を活用している。	2.8			

※1 カリキュラムの面（要素ア・イ）では「関連性」に、マネジメントの面（要素ウ・エ・オ・カ・キ）では「協働性」に留意する。  
 ※2 教育課程に関しては、目標、内容、時数に加え、教材、指導方法、評価等を視野に置く。

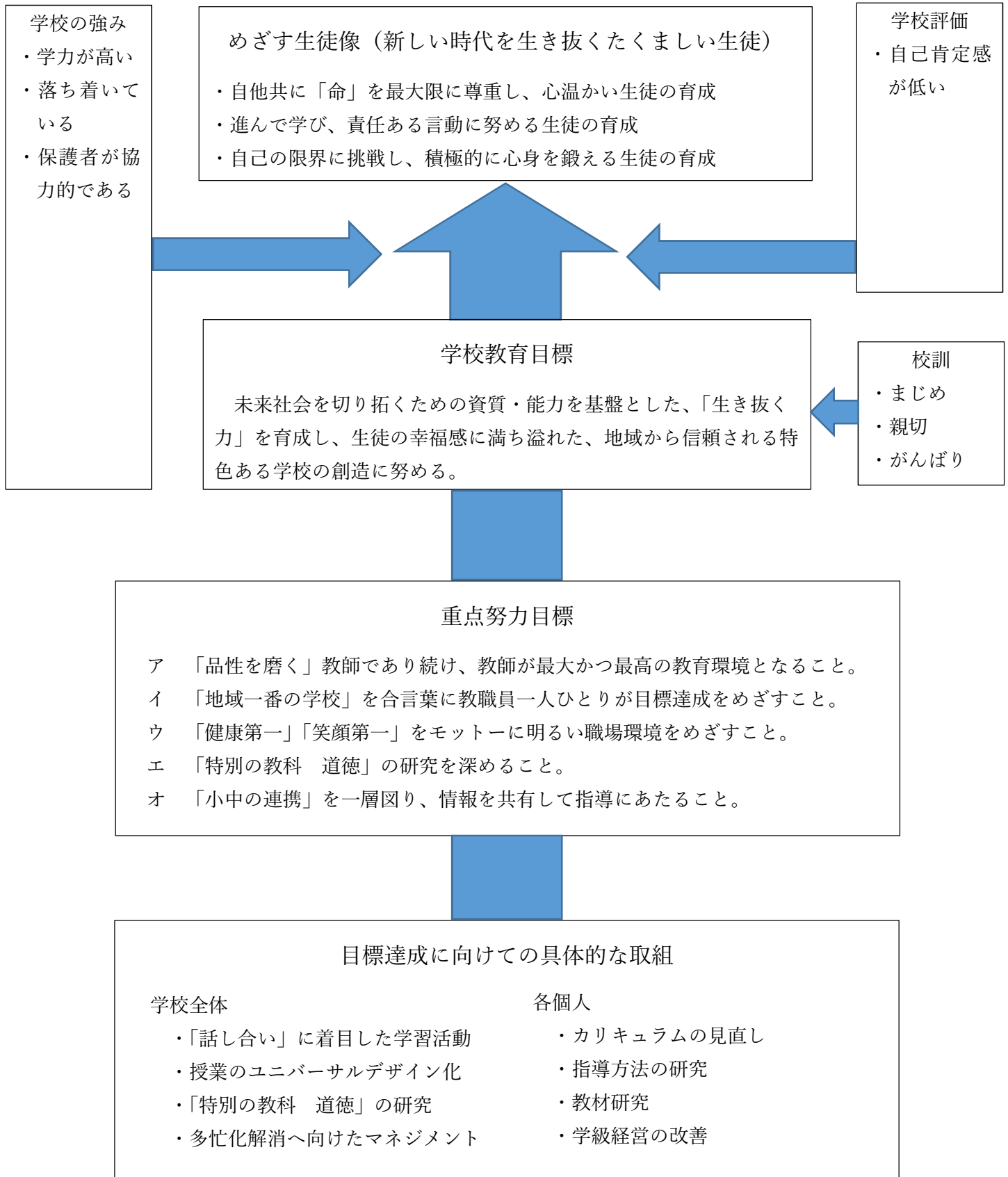
要素・項目について評価し、個別の要素・項目を理解し向上させるだけでは、システム全体として効果的に機能するには不十分です。「部分最適化」という問題が起こることもあります。そこで、右の図のPDCAの間のつながりや、矢印①～⑩が示すつながりに着目してください。他の要素にまでポジティブ・ネガティブな影響を及ぼしている要素はありますか。どの要素にこれ入れをしたら、他の要素まで望ましい変化が表れるでしょうか。気付いたことを書き込んでください。

つながりについて気付いたこと、考えたこと（強み、課題、てこ入れのポイントなど）  
 ・学年、教科等、何においても職員間の温度差がある。  
 ・正規教員が足りていない。非常勤講師では、校務分掌の仕事が割り振れない。結果として、正規教員に仕事が増えることになる。余裕がなくなるので、本来やっていくべきことができている。  
 ・研修に行っても、代わりに誰かが仕事を進めてくれるわけではない。  
 ・多忙化解消を目指すべきである。部活動の改革は有効のようである。  
 年齢構成のアンバランスさ、バウハラが指摘される風潮、学年経営の独自性とマンパワーを強みとしていることと活和と生徒、柔軟な保護者、地域性により、外的な強い刺激が少ないこともあっての現状であるということが再認識できた。





## 永和中学校の教育活動



【添付資料4】 資質・能力の育成に向けたカリキュラム・マネジメントシート

- 学校教育目標  
 未来社会を切り拓くための資質・能力を基盤とした「生き抜く力」を育成し、生徒の幸福感に満ち溢れた、地域から信頼される特色ある学校の創造に努める。
- 自校の児童・生徒につけさせたい資質・能力  
 表現力、思考力、自立できる力、調整力、コミュニケーション力など。

国語

- ・ 自分の考えや思いを的確に伝える表現力を高める指導を心掛けている。討論や小論文をできるだけ多く設定している。**表現力**
- ・ 自分の感情を正しく表現できるように語彙力の向上をめざす。**表現力**
- ・ 相手の気持ちを考える力を育てる。**コミュニケーション力**

社会

- ・ 教科書に載っている資料を読み取る力を身に付けさせる。(これまで学んだこと、知識を使った上で行っていく) **思考力**

理科

- ・ わかりやすい説明をする。**表現力**

数学

- ・ ただ答えを求めるだけでなく、なぜその答えになったのか考え方や解き方を発表させる。他の求め方をした人がいないか聞く。**表現力**
- ・ 証明問題の単元では、自分の言葉で表現し導かせるために、記述の証明も取り入れる。**表現力**
- ・ 自作小テストで基礎学力の定着を図っている。
- ・ 論理的思考力を高めるため、定義をきちんと理解させ、論理的に正しい思考展開を重視している。**思考力**
- ・ 個々の学力に合わせた指導を心掛けている。机間指導による個人指導、ワークブック提出時に個別目標を立てる。

英語

- ・ 英語での会話において、他の生徒や教師がうなずいたり、教師が伝えたいことを言い直したりすることで、伝わる喜びを育み、自己肯定感を高める。
- ・ 既習の言語材料を積極的に用いて自分の考えを表現する力を身に付けさせるとともに、他人の意見に対して自分の考えを賛成・反対などの理由とともに意見する態度を養う。**コミュニケーション力**

音楽

- ・ 自分の考えを言葉にし、曲の特徴とともにそれを生かして表現につなげる。**表現力**

美術

- ・ 新しい知識の習得を、体験を合わせて行う。また、体験上の疑問やうまくいかないことを拾い上げ、改めて例をあげながら、説明・修正を加えて知識とさせる。

技術・家庭

- ・ 技術・産業分野における教科書に載っていないような雑学にできるだけ多く触れさせる。**思考力**

体育

- ・ ICT 機器で動画を撮り、自分の身体の動かし方を見て、どうすればよいかを考えさせる。**思考力**
- ・ 学習指導要領を精読し、本校の目標と生徒の実態に合わせたカリキュラムを開発する。スポーツの特性から何を取り出し、実態にどのようにアプローチするのか。1・2年生で基本スキル、考え方、3年生でいかにそれらを使うのか。**自立できる力**

道徳：話し合いに着目して、生徒の言葉を引き出す授業を行うことで、生徒の人間性を高めることをめざす。

教科外

- ・ 保健集会を通して、自信をもって発表できるようにする。**表現力**
- ・ いのちの授業、薬物乱用防止教室を通して、自他を大切にする心を養うこと。**調整力**
- ・ 学級、学年行事では、常にどこまで生徒に行わせるかを考えている。**自立できる力**
- ・ 自己肯定感を高めるためによりよいことをしたら全員の前で誉める。
- ・ 担任の考えや思いを伝えるために学級通信をために作成する。**思考力**

生徒の実態

強み 学力が高い 落ち着いて学習に取り組める 男女の仲がよい

弱み 自己肯定感の低さ 生活面 人間関係



## 学校全体の重点目標

相手の立場や気持ちを理解できる心と自己の思いを伝える力を育成する

### 各学年の重点目標

1 学年

自分の考えや意見を相手に伝えるとともに、それぞれの個性や立場を尊重する。

2 学年

それぞれの個性や立場を尊重し、いろいろなものの見方や考え方があることを理解する。

3 学年

それぞれの個性や立場を尊重し、寛容の心をもって謙虚に他に学び、自らを高めていく。

### 重点教科の抽出

#### 各学年の目指す子どもの姿



1 学年	2 学年	3 学年
自分の考えや意見を相手に伝えるとともに、それぞれの個性や立場を尊重する生徒	それぞれの個性や立場を尊重し、いろいろなものの見方や考え方があることを理解する生徒	それぞれの個性や立場を尊重し、寛容の心をもって謙虚に他に学び、自らを高めていく生徒



重点教科

道徳

～考え、議論する道徳科の授業～

## 【添付資料6】 「話し合い」活動報告書 例

- 教科：保健体育
- 学年：3年
- 単元名：体づくり運動

- 「話し合い」のねらい

自分たちの体力に合ったトレーニング計画を男女がいっしょに話し合うことで、様々な意見を得てよりよいものとするため

- 手段

男女混合のグループによる話し合いによって、トレーニング計画をたてる

- 実践報告

授業の前半で、トレーニング計画の基本的な考え方、知識を伝え、個人の運動課題とそれに対応するトレーニングプログラムを考え、ノートに記入させた。その考察結果を基に班別運動計画を行った。運動経験が豊富であったり、普段から計画的な行動（テスト勉強やスポーツクラブでの経験）が得意だったりする生徒が含まれる班は、その生徒がリーダーシップをとりながら、意見を集約し、効率的に計画を組み立てていた。一方で、そのような生徒が含まれない班では、なかなか計画できていなかった。そこで写真のように班に介入し、計画の方向付けを示しながら、話し合いの発展を促した。

また、実際に授業が動き出すと計画とは異なる時間のかかり方をしたり、運動負荷が適切でなかったりする可能性があるが、運動しながら計画を修正していく場面でも話し合いが必要になる。その場면을大切にすることも伝えた。

- 結果と課題

報告にも含まれるが、今回は班構成を生活班としたため、運動経験や高めたい運動要素がさまざまになった一方で、運動経験があまりない生徒が集まった班と、運動経験が豊富な班との差ができてしまった。それを吸収するためには、各班の運動計画を発表し、学級で共有する必要があった。しかし、それを行うには、計画する時間の確保が難しかった。体育では、常に運動量・時間と話し合いや発表の時間とのバランスを問われるが、運動計画実践の場面で、他班の動きも少し意識しながら、それぞれの班の運動計画の修正のヒントとするように声をかけていきたい。

## 【添付資料 7】

## 各教科の活動報告書

- 教科：技術科
- 学年：2年
- 単元名：生物育成に関する技術
- ねらい
  - ・ 生活や社会で利用されている生物育成の技術についての基礎的な理解を図り技能を身に付ける。
  - ・ 生物育成の技術と生活や社会、環境との関わりについて理解を深めるとともに、生活や社会の中から生物育成の技術に関わる問題を見いだして解決する力を身につける。
  - ・ 育成する生物の成長、働き、生態の特性に配慮し、育成環境の調節方法等を最適化する。
- 手段
  - ・ 地域や学校の状況を考え、取り扱う教材は種から育てるミニトマトの容器栽培とした。植物を取り扱う上で他教科と関連が深いのは、光合成、呼吸、蒸散などが理科1年「植物のつくりと分類」、肥料の三要素は2年理科「物質のなりたちと化学変化」であるので、履修学年と授業時数は2年生15時間とした。また、既存の育成環境を調節する方法を選択することで解決できる課題に取り組みせたり、既存の技術の管理・運用について考えさせたりするために履修の時期は4月から7月までとした。
  - ・ キャリア教育との関連は、自分なりに工夫して生物を育成する喜びを体験させるとともに、生物育成の技術は、食料、バイオエタノールなどの燃料、木材などの材料の生産や、花壇や緑地等の生活環境の整備など、多くの役割をもっており、この技術の進展が社会を大きく変化させてきた状況や、生物育成の技術が自然環境の保全に大きく貢献していることについても触れ、これらに関連した職業や、新たな技術の開発についての理解を深めさせることにも配慮した。
- 実践報告
  - ・ 植物の健康状態を確認し、生育環境の調節方法を最適化する時間の学習の流れ。

目標	・学習の目標を知る。	・管理作業について、調べさせる。	
健康の管理	・植物の健康状態を確認し、病気や栄養不足、害虫などへの対策を行う。	・健康の生育には、二酸化炭素、酸素、水のほかに、窒素、リン、カリウムなどの養分が必要であることを確認し、健康状態に応じて施肥を行う。 ・病気や害虫、連作障害など植物の健康を妨げる要因について、注意させながら、観察させる。	<b>[知識・理解]</b> ・施肥や病害虫の駆除など植物の健康管理作業についての知識を身につけている。 (授業中の活動、栽培記録、ワークシート)
収穫	・収穫適期に収穫する。	・収穫の時期は必ずしも全ての植物が同じ時期ではなく、収穫適期に収穫することを伝える。	<b>[技能]</b> ・植物の健康状態を検査して、適切な管理作業ができる。 (授業中の活動、栽培記録、ワークシート)
まとめの活動	・学習内容をまとめる。	・学習のまとめを行う。	

### ○ 結果と課題及び活動の様子 (写真)

生物育成に関する単元を2年生の初めに実施することにより、1年生理科で学習した光合成、呼吸、蒸散などの内容をもとに、植物を観察するポイントや、かん水、遮光など環境を調節する作業の必要性を明確にしやすくなった。また、2年理科の物質な成り立ちを化学変化で原子と分子を履修した後に肥料の三要素を学習することで、トマトの健康管理を生活経験からくる概念だけではなくN、P、K及びCa、Mgの各要素の欠乏として具体的にとらえ最適化を考えられるようになった。

1年社会の地理「世界の諸地域」で学習した諸地域の気候に関連付け

て授業を展開すれば、作物の原産地という今までと別の視点から生育環境の最適化を考えることもできると思われる。

